

# 大阪 ■ ■

No.39 2007.11.10.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2007

# 哲学学校

【郵便振替】 01170-1-81313

【E-mail】 oisp@mac.com

【Home Page】 <http://oisp.jp/>

【Net Forum】 ホームページに掲示板を開設

【代表者】 山本 晴義 (校長)

【発行者】 平等 文博 (運営委員長)

【編集者】 平等 文博

【連絡先】 電話 080-5359-5140

# ■ ■ 通信

---

## 池田晶子さんを悼むー「暮らしの哲学」から

松尾 猛省 (会員)

本年の二月に池田晶子さんが急逝した。その朝刊の訃報に思わず衝撃が走った。なにしろ未だ四十代の若さである。

池田さんの書物をはじめて手にしたのは「十四歳からの哲学」で考えるための教科書とあった。本「哲学通信 26号」で以前すこしそのことに触れたが、それから四年を待たずにしての、よもやの訃報であった。

さて、本題の「暮らしの哲学」であるが、帯にもあるごとく、暮らしの中で問い続けた存在の謎。急逝した哲学者の最後の一年間、週刊誌「サンデー毎日」に06年4月から07年3月までに連載されたものであるが、哲学的な題材の範疇から少し距離を置いた題名になったのも、いつか訪れる自身の死の予知的なものが加味されたのか否や、そのあたりのことは、本人でなければ分からないが、なにか予感的なものを節々に感じとられるところもあった。

春は「春に思うこの感じ」夏、「生命の漲る季節」秋は「悩ましき虫の音、秋の夜」と四季の流れに沿って人生を振り返るペンの進め方をみても、このあたりで、なにか人生論的な纏めの想でも

あったのかという思いもよぎる。

「春に思う」で著者は桜をとりあげ「始まりの痛み」に触れている。痛みを知ることがつまり、生と死、人生を知ることなのだ。

毎年巡り来る桜に著者はことのほか思いをこめ、一種特別の感慨を抱く。

春に桜が咲くのは当たり前前のようにだけど、この当たり前のことが、年年歳歳、深く感じられるようになるのは、どういうわけでしょうね。まさに語りかけの口調である。

何だか毎年いよいよ何かこう、絶句、放心するような領域に入り込んで、思いふけるばかりです。梶井基次郎は桜の花の根本に死体を甦らせ、西行もまた桜の下で春死なんと詠ったが…。さて、始まりの痛みとは何を意味するのか。

勿論その始まりの痛みという言葉は、高校時代の教科書に載っていた安岡章太郎氏の「春は残酷な季節」の一節を思い出してそれをひきあいに、当時その意味が理解できなかったが、はるか歳の月を経て今ようやくにして、その意味が分かったと仄めかす。

それもそのはず、春になれば開花宣言に待ち

焦がれ、群立つ人々は花見酒に、ひとときの放逸に憂さを晴らす巷の光景、その紅顔をよそに、始まりが痛みであるとは、高校生の若い身空でその意味が正直、理解できなかったのも無理もないであろう。

それが、いま、春は過ぎ去って帰らないものを後ろに残して始まることの意味が。失くしたものがあつた。亡くなった人もいる。去年の桜は一緒に見て笑っていた。けれどこの春その人はいない。いわば、諸行無常の世界、だが桜は今年も変わらず咲いている。

著者本人、来年は生きていないかも知れないと洩らしているところなど眼にするが、当人は、でも死んでいるなら、桜が見られないと悲しむ自分はいない。そうかもしれない。いない自分を憂えるなんてまさにナンセンス。人が桜の花を見たいのは、そこに魂の永遠性、永遠の循環性を見るからだ。それは魂が故郷へ帰ることを希うような、多分そういう憧れに近いのだ。—まさにこれは池田さんの鎮魂歌。

死の影の陰影を帯びた「春に思う」に比して、「生命の漲る季節」夏は趣をかえてすがすがしい生命の力を感じるものとなっている。

だが、また池田さんはその生命とは何かの謎に触れ、科学はそれなりの物理的な仕方で生命の構造を説明するが、何故それがそのように動き、その力がどこから来るのか根源的なものはいうまでもなく説明不可である。それはいうまでもなく、科学の世界の領域ではないにしても。生命の不思議は生命現象という内容の不思議といい、どっちの道をたどっても最後には不可知のX、生命、万物、生きとし生けるもの生かすめるその力は、そのまま、宇宙と天地、季節の巡りを司るから、その力において天地の万物は呼応しているとも。

春になると花が咲き鳥が鳴き人々が活気を帯びるのは、その季節に生命の全体が高潮を迎えるからなのだといわれればなるほどと頷く。

それを称してコスモロジー、季節を感じることは宇宙を感じることに他ならない。

桜の花に人は死の影を見るが、木々の若葉に死を見ないのも桜においては冬と春、我々の死と生とが交差するから、若葉から新緑そして万緑へと、再生の燃え上がる力を見る思いだと。万緑という言葉、広辞苑を引いた著者がその用例の句。

万緑の 中や吾子の齒 生え初むる 草田男  
万緑や 力をこめて 鐘をつく 非文

生えてくる齒に万緑と同じ生命の力を俳人は感じ、どこかの山寺での鐘の音が万緑を震わせ響き渡るさまが眼に浮かぶ。

こだまして返ってくる万緑の香りに噎せてしまいそう、ここには春にみた死の影は微塵にも見られず普段着の彼女の姿であったが。

虫の夜の 星空に浮く 地球かな

大峯あきら

悩ましき虫の音 秋の夜に掲げた一句である。夏の名残の吟醸冷酒で一杯やりながら、眼を閉じ聴いていると、自分が虫の音となって鳴いているような感じに妙趣を覚えると、愛飲家の池田さんらしい。

池田さんはいふ。この句が面白いのは、虫の音を聴き、星空を眺めているところの私が、虫の音となり、星空となる逆転の構図を鮮やかにとらえているところが面白いと。

星空に浮く、「浮く」という言葉が端的にそれを現している。

秋の夜長に私が虫の音を聴いているのではない。ただ虫が鳴いている。(私)が虫の音として鳴っている。私が星空を眺めているのではない。(私)が星空として存在していることにと。

「私とは何か」という恐るべき問いの末、池田さんは永劫の謎の形をここに見て、虫の音ひとつ聴いたって、もう宇宙旅行だと結んでいる。存在の謎。気ままな彷徨である。

この常人を逸したきてれつな問いかけや発想は池田さんのどこから出てくるものなのかと、その思いを抑えずにはいられないが、「変人道まっしぐら」の項を読めば、いささかなりとも、そのヒントらしきものを感じとれるかもしれないので少し抜粋してみよう。

—「変っている」といわれ続けました。うんと子供のころから、ところが本人としては、自分が変わっているなど思ったこともない。

世間の人は普通の当たり前のこと、当たり前すぎることについて、考えるということを滅多にしていない。そういう事柄が存在しているということすら気がついてないということに、世間で生きるにつれて気がつくことになる。

その意味で、私の人生は、世間の人とは逆向きに歩んでいるわけであった。

だから人からは「変まっている」と見えるのは当然で、私にとって当たり前のことが人には当たり前でない。私ははたちを過ぎていよいよ自分がただの人ではなくなっていくのを感じた。私は自分が天才であると気がついたのは二十二の時です。その時、世間と自分とのこのギャップの意味を理解しましたが、逆に深く困惑しま

した。

—養老孟司なども典型的な例です。あの人は本当に変な人です。そういう養老氏が私にいう。「あなたは変わっている」あれほどの変人から変人呼ばわりされるのだから、「先生のほうが変わってますよ」よく考えると、可笑しな問答です。変人×変人=大常識人。

しかし、「この逆向きに歩いている」という感じは年々強くなるばかりで、時々「こんど生まれるかわる」としたら普通の人になりたい、そういう感慨にとらわれます。吾が意を超えた深い深い業であります。

これを読めば、池田さんに対する謎の部分も少しは解けるかも。その父親からもお前は変わった子だ。その父親像については「あなたの親は親でない」に触れているがもうその余裕もない。お前は変わった子だ。その変わったがゆえに女哲学者としての池田晶子の存在があり、

惹かれる読者も増えつつあったが、無情にも唐突にその帆先をへし折られた感じで誠にやるせない思いである。遅まきながら追悼の言葉としたい。

〈知の歴史〉入門講座

(各回とも土曜日)

## ゲーテ自然科学と現代

11月24日・12月8日・22日

講師・大槻裕子さん(大阪経済大学教授、近著『ゲーテとスピノザ主義』2007、同学社)

●午後1時半～5時半 ●尼崎労働福祉会館(阪神尼崎下車、徒歩10分) ●参加費各回千円

【講師より】一八世紀ドイツの詩人ゲーテ(1749-1832)は終生スピノザ(1632-1677、ポルトガル系ユダヤ人哲学者)の思想的影響下にありました。ヴェールターの詩人であり、ワイマールの国務大臣でもあったゲーテは、詩作のかたわら国政上の必要に迫られて自然研究(鉱山学)をはじめました。爾来彼は(動物・植物の)形態学研究、色彩論、気象学等々の研究に従事します。しかしながら、「神即自然」という一元論的なスピノザ主義を前提とする彼の自然研究は、まったく独特なものでした。ニュートン以来行われてきた近代の自然科学的方法では、観察結果としてのデータのみ伝達に終始しますが、そこには観察する側の人間の存在があり得ません。これに対し、ゲーテ自然科学では観察者の存在、主観の存在そのものが問題となります。こうした立場の研究方法は、現代の加速度的に進歩を遂げた、いわば客観主義的な近代自然科学のオプチミズムに対する批判の一石として、現今、その存在意義は高く評価されるべきと思われます。

## 今、家族と市民社会・国家の関連を問う

藤田 隆正（講師、会員）

世界人権宣言 15 条「家庭は、社会の自然かつ基本的な集団単位であって、社会および国家の保護をうける権利を有する。」

市民社会や国家は多くの人々によって論じられている。それに対して家族を論じる人は少数である。また、市民社会、国家を家族と関連させて語る人は、さらに少ない。家族はこの程度のものだろうか？ なぜ、エンゲルスは家族・私有財産・国家を関連させたのか、なぜ、ヘーゲルは家族・市民社会・国家を関連させたのか、もう一度そこにもどる必要があるのではないか、私はそう考えた。そして、そこから市民社会・国家と家族の現代的関連を明らかにしたい。

ある論者はいう。「家族という集団自体の原理というものは、内部的には、元来市民社会的なものではなくて、普通は共同体的なものですよね。ということは、市民社会的な個人とか近代的な自我というものとは、どうしても矛盾する面を家族という集団はもってくるわけです。その矛盾がどうしてもないところまできているのが現在じゃないかと思うんです。それは現象としてはよく問題になっている家族の解体とか、独身主義とか」（見田宗介）

この論者のいうように、やがて家族は消え行く存在でしかないのか。そもそも家族の意義とは何か。近代においてそれを思考した代表的な思想家がカントとヘーゲルである。

### 1 カントとヘーゲル

カントによれば、家族は自然な性を異にする二人の人格が結びつき、お互いの性的な特性を

生涯にわたって所有する契約である結婚によって成立する。

結婚によって、二人の人間がお互いを自律した契約相手ととらえ、お互いを尊敬しあう人格性を形成していく。だから、家族関係においてはお互いに同等な権利をもち同等な義務をもつ。

この考え方によれば、家族の構成員の関係は、権利と義務の契約関係となる。社会と同様に家族においても一人一人の人格は、一定の権利を要求でき、それは他の構成員によって満たされねばならない。各人は他の構成員の正当な権利要求に応じる義務をおっている。家族以外の社会で確立された正義の原理が家族にも適用されている。

このカントの契約によって家族が成立するという考え方は、性差に起因する家族内の不平等を克服する有効性をもつものとして多くの人々の支持をえた。

これに対して、ヘーゲルは、愛という感情の一体性によって家族関係は成立すると考えた。彼によれば、結婚によって二人の互いへの愛が二人の間により高い一体性を形成するかぎり、他の集団にはない家族の特徴が形成される。

たしかに、カントのいうように結婚は、契約を結ぶという法的形式をとることによって成立する。しかし、それは単に形式に過ぎず、家族関係が成立するには、互いに認め合う感情が愛に統一され、それぞれの願望の充足が可能になることが必要である。家族関係は単なる権利関係ではない。

家族の関係は、権利や義務のやりとりにあるのではなく、相手を認める感情から生じる相手に対する配慮や思いやりによってなりたつのである。要するに、家族関係における道徳的源泉は、

権利や義務への理性的洞察によって生まれるのではなく、相手に対する配慮や思いやりという愛からしようじるのである。

しかし、ヘーゲルのこの考え方は古い共同体を正当化し、家族内の性差や不平等を肯定する保守主義と批判される。

しかし、ヘーゲルは契約を批判する。契約は、当事者の恣意から出発し、かりに当事者の意志が一致しても、それはたんに共通の意志にすぎず、けっして普遍の意志ではない。「婚姻はその本質的基礎において契約関係ではない。」

マルクスも1842年に「プロイセン離婚法案」の反対者を批判している。反対者たちは、個人の意志もっと正確には婚姻当事者の気ままな意志だけを考慮し、婚姻そのものもつ意志、その人間関係の人倫的基礎を考慮していないと。

たしかに、家族が二人の自由意志にもとづく契約である婚姻によって成立するのであれば、家族は成立も解体も当事者の自由となり確固たる存在ではないということになる。

しかし、家族は人類の起原より現在までさまざまな問題をかかえつつも、たえることなく存在してきたのである。この家族の確固さはどこから生まれるのか。それを求めてエンゲルスの家族論にはいたい。

## 2 エンゲルス・マルクスの家族論と家族の本質的役割

マルクスが『経哲草稿』で、資本主義社会における労働の歴史的現象形態を疎外された労働として捉えることができたのは、労働の本質的なあり方を把握していたからである。これに学んで、私は家族の本質的なあり方を捉え、現代社会における家族のあり方を捉えたい。

エンゲルスは『サルがヒトになることに労働はどう関与したか』で人類の起原を論じ、『家族・私有財産・国家の起原』で家族論を展開した。

1875年にエンゲルスはラヴォローフへの

手紙でいう。「万人の万人にたいする戦い」が人類発展の第一段階だった、というご意見には、私は同意できません。私の見解では社交本能こそ、サルからヒトへの発展の最も重要な挺子のひとつだったのです。」

しかし、彼は、なぜ人間が社交本能をもつのか、なぜ人間は動物と異なり生産するようになったのか、人間の社会とは具体的にいかなる形態をもつのかについては答えていない。

1920年以後急速に発達した人類学・考古学・生態学・霊長類学などの成果にもとずいて、エンゲルス・マルクスの進化に対する見解を私なりに再構成してみた。

では、家族の本質的役割とは何か。

エンゲルスは「家族・私有財産・国家の起原」の序文でいう。「唯物論の見解によれば、歴史を究極的に規定するのは、直接的生命の生産と再生産とである。だが、この生産と再生産はそれ自体また二重の性質のものである。一方では、生活手段の生産、つまり衣食住の用品の生産とその生産に必要な道具の生産、他方では人間自体の生産、つまり種の繁殖が、それである。」

ここで、エンゲルスは「生命の生産と再生産」を生活手段、道具の生産と人間自体の生産、種の繁殖の二重性においてとらえている。そして、生活手段、道具の生産については「ドイツ・イデオロギー」で分業の発達の視点から歴史的に展開している。それに比べて人間自体の生産・種の繁殖の展開は、ほとんどふれられていない。

私の家族についての本質的役割を次にのべてい。

どの生物であれ最大の課題は、生殖・養育によって種を保存することである。他の霊長類に比べて人間の生殖・養育で重要なことは、人間は他の種に見ることのできない独自の方法を創出したことである。

それが、家族と家族が属す地域共同体によって行われる生殖・養育である。(もちろん中心は家族である)

サルには群れという集団はあっても、家族という集団はない。家族は人間にいたる進化の系列では人間になって、初めて形成された。

家族の重要性は、家族が経済的に協力しあうことのみにあるのではない。経済活動ということでは、家族ではなく、家族と家族からなる地域共同体が単位である。狩猟にしろ採集にしろ家族単位でおこなわれたのではない。地域共同体の構成員の協働でおこなわれたのだ。

それにもかかわらず、人間社会の基礎単位に家族をおくのは、人間の本質の形成が家族を基本としてなされるからである。

チンパンジーは集団で獲物を襲うこともあるが、自分自身の食べ物を得るのも食べるのも個体別であって、協働したり分け合ったりしない。しかし、人間は協働で食べ物をえ、チンパンジーのようにその場で食べるのではなく、地域共同体まで運搬し構成員や家族と「分かち合い」ながら食べコミュニケーションを取り合う。

食べるだけでなく、子供の育児・道具の製作・技術から価値・文化・イデオロギーなどを「分かち合う」。「分かち合い」なくして人間社会は成立しない。人間社会の構造原理は「分かち合い」にあるといえる。

人間を人間たらしめる人間の本質は、動物のもつ暴力や攻撃性ではなく、それらを抑制して行われる「分かち合い」である。「分かち合い」は人間の創出したものといえる。

人間の生殖・養育は長期間にわたる。この長期間に家族や共同体の人々が「人間のかけがえ

のなさ」、「他者へのやさしさ」、「ともによりよく生きる」ことを学ばせていく。こうして子供の動物的本性は抑制され、人間の本性が形成される。

たとえば、食べるという行動はほとんどの動物では、順位制にもとづき強者が力づくで食べ物を独占し満足するまで、一人でひたすら食べる。その後余り物を弱者が食べる。もし余り物がなければ、飢えて死ぬしかない。このことは兄弟でも同じである。

しかし、人間の家族では、親が強い兄に弱い弟にも分かち団欒しながら食べることを躰ていく。また、動物は自分の欲しいものは相手から奪う。盗む。人間の親は奪うことや盗むことを禁じる。

このように、人間の親（そして共同体の人々）は子供に人間生活が「分かち合い」で形成されていることを自覚的に教え、人間の本質をもった人間に育てていく。その最も大きな役割を担うのが家族である。

以上のことについて、エンゲルスはほとんどふれていない。

「分かち合い」は、人類の誕生以来約700万年にわたって絶えることなくうけつがれ、家族や福祉、ボランティア、非営利活動などとして現代社会に大きな影響をあたえている。

(2007年10月7日)

藤田隆正 著

『新・倫理考—「分かち合い」の発見』(2007)

10月27日の大阪哲学学校で、「人間の尊厳」とは何か?—唯物論の視角から」と題してお話をいただいた藤田隆正さんの近著を、著者割引価格(1500円)にてお求めいただけます。希望される方はご連絡ください。なお郵送ご希望の方は送料実費を別途ご負担ください。



## バス停近くで

上野山 定由（会員）

四歳くらいの男の子  
 人をかきわけ誰かを探している  
 小走りで あたりを行ったり来たり  
 そのうち 母ちゃん 母ちゃんと叫びだし  
 血相かえて やみくもに駆けまわっている  
 耐えきれなくなったのか 大声で泣き出した  
 どこで母ちゃん 見えなくなったの ここでかい  
 泣きじゃくりながら頷く  
 それなら ここで母ちゃん来るのを待ってしよう  
 来ない 来ない ボクを捨てたんだ  
 いつも言うてた 言うことを聞かないのなら  
 遠い所へ捨ててしまおうて  
 わあと泣きだし つま先の破れから指のぞかせて  
 じだんだ踐んでいる  
 ボクを捨てるものか 母ちゃん きつと迎えにくるよ  
 それまで一緒にいてあげよう

日が暮れかかろうとするのに 母親は姿を見せない  
 いつのまにか私の上着の裾を

幼い手がしっかり掴んでいる

ボクのおうちは何処かね あつちと手をあげるだけ  
 母ちゃんとバスできた 少し先にバス停が見える  
 ボクの名前はと たずねると 私と同名  
 母ちゃんは 私の母の名を言う

涙と水っぱなの顔を拭いてやると

夕明かりに

二 三枚残っている幼い頃の私の写真にそっくり



## 2007年夏期合宿の報告

木村 倫幸 (参与)

恒例の夏期合宿が、8月25日(土)～26日(日)の2日間に、季報『唯物論研究』刊行会・大阪唯研哲学部会との共催で開催されました。今年場所は、合宿としては初めてですが、奈良市内猿沢の池の畔、ホテル大和路でした。参加者は、延べ17名。

25日午後には、木村から「第9条をめぐる最近の論調」と題して研究報告があり、ここでは、憲法9条擁護をめぐるいろいろな視点が紹介されました。ここでは、これまでの護憲論の主張と現実の変化が対比されつつ、その中で第9条擁護の視点が広まり深まりつつあることが指摘されました。例えば『みんなの9条』(集英社新書)掲載されている視点として、9条を人権問題との関連で考える視点——戦争が人権侵害であるという視点、女性の権利からの視点、平和的生存権からの視点等——や、沖縄からの視点、東南アジアからの視点、若者の現状からの視点、エコロジカルという視点など、さまざまな視点からそれぞれの9条擁護の運動が可能であることが示唆されました。

夕食後は、玄関を出て直ぐの石段を登れば興福寺ということから、奈良公園を通過して、東大寺まで散策ということになり、ライトアップされた古寺の夜景を堪能しました。その後の交流会も、窓から猿沢の池を眺めつつ大いに盛り上がりました。

翌26日は、平等さんから「戦争の倫理をめぐる」という題で報告がありました。ここでは、戦争倫理学とりわけ戦争の倫理的価値判断——戦争の正／不正についての立場——と歴史的推移を中心に報告され、9条の平和主義を「世界基準」にして戦争そのものの廃絶へ——「国家の安全保障」から「人間の安全保障」へ——という運動の方向性が強調されました。

2日間にわたった合宿は、以上のように終了しましたが、久しぶりにお会いする懐かしい顔もあり、さまざまな話題に大いに話が弾みました。この合宿も15年以上続いているのですが、参加するたびに、新たな知識と刺激的な討議で得るところは大きいと感じています。また来年の合宿を楽しみにしております。

## 大阪哲学学校活動日誌 (「通信」38号発行以降)

2007. 4.14. 「大阪哲学学校通信」第38号発行  
 4.14. 2007年開講講座 ..... 講師・山本晴義  
 「憲法九条の思想—アメリカ・リベラリズム、第九条、そして現在の課題」  
 5.12. 同(第2回) ..... 講師・山本晴義  
 5.26. 同(第3回) ..... 講師・山本晴義  
 6.30. 大阪の歴史と文化・「大阪における自由民権運動—過激派を中心に」  
 第1回「交誼社と『明林新誌』」 ..... 講師・北崎豊二  
 7.14. 同、第2回「大阪自由党と『文明雑誌』」 ..... 講師・北崎豊二  
 7.28. 交流会兼〈納涼〉拡大運営委員会  
 8.25~26. 2007年度夏期合宿(季報『唯物論研究』刊行会、大阪唯研哲学部会と共催)  
 9.29. 「日中戦争の体験を語る—加害と被害の両面から」 ..... 語り部・藤原吉夫  
 10.13. 「デカルトの道徳思想—科学と倫理のはざままで」 ..... 講師・大田孝太郎  
 10.27. 「〈人間の尊厳〉とは何か?—唯物論の視角から」 ..... 講師・藤田隆正



# 筒井康隆著『虚構船団』の人間論

やすい ゆたか（会員、講師）

ベトベトと糊に陰部をまさぐられ

目覚めてみると『虚航船団』

上村陽一は、ネトネトした圧迫感を感じていた。空気全体が湿り気を濃くして、体全体を押しつぶそうとしている。特に下半身が気持ちが悪く、むずむずしてきた。それより胸部圧迫感から解放されなければ、押しつぶされてしまうので、全身に力をこめて寝返りを打とうとして、目覚めた。巨大な糊が体に覆いかぶさっている。そして糊に下半身のもっとも性感の敏感な部分をまさぐられていたのである。

「コンパス、起きろよ、もうすぐ作戦会議が始まるぞ」とセクハラぐせのある糊はつぶやいた。「コンパス？」糊が話しかけるのも奇妙だが、自分がコンパスというのもたまげた話だ。「本当に俺はコンパスなのか、コンパスといっても円を描く普通のコンパスなのか、烏口コンパスなのか、ディバイダーではないのか、それとも観測器具のコンパスなのか、どのコンパスなのだ。」糊はあきれた「またコンパス君のアイデンティティ不安が始まったな。長い二本の脚の先が尖っていて、スマートな普通のコンパスだよ」。たしかにコンパスのような姿をしている。

なんとコンパスになってしまったのだ。俺は上村陽一で、「榊周次の人間論の穴」に嵌っているのだった。そしていろんなキャラクターを演じてきたが、今度はコンパスだなんて、しかも糊なんかセクハラされて、榊先生のやることはまったく奇想天外だな。

脚まげて円を描くのはダサすぎる

スックのばしてクルリひと舞

両脚を屈伸させてみる。そのままのっしのっしと相撲取りみたいに歩いてみた。とたんに周囲が笑い転げる。「おや、珍しいね、そんなディバイダーのような不細工な格好は死んでもできるか！と言っているも脚を伸ばしていたのに。」と三角定規が不思議がった。陽一はパニックになった。そうかコンパスは自分がかっこよくないとたまらないんだ、たしかにダサすぎる。コンパスにしたら死にたいくらい恥ずかしいに違いない。ここはオーバーアクションでいかになくちゃ。そう思うと、急につらくなって涙がこみ上げてきた。「アー俺はダサ、ダサコンパスなのか、ああ、コンパス失格じゃないか、オーイオーイオーイ、オーイオーイオーイ」としゃくりあげた。

泣き疲れ我を忘るるばかりなり

涙の中へと解き放たれむ

糊が慰めようとくっついてくる。陽一は気持ち悪いので避けながらなき続けていた。チョークが言った。「ほっとけ、ほっとけ、コンパスの野郎は、泣くだけ泣いて、硬直した自我から解放されようとしているんだ。泣いて泣いて、泣きつかれてアイデンティティをかなぐり捨てたら、アイデンティティ不安からも解放されるんだろう。いつも無理してかっこよくコンパスを演じていたから、その分だけ涙の中の解放感も大きいんだ。」

それにしても今までだと自分が上村陽一だという記憶が意識下に抑圧されていたのだが、今回は別らしい、そういえばコーヒープレイクで上村陽一がふと我にかえることがあってもよい

のではないかと、榊に強く要請していたので、早速聞き入れてくれたのかと思った。でもいつ記憶を抑えられるかも分からないなど思った。そういえば、筒井康隆の小説に『虚航船団』というのがあって、文房具が魑の星を攻撃し、ハルマゲドンみたいになるという傑作があるから読んでおくように、榊に言われていたことを思い出した。こんなことなら読んでおけばよかった。

ゴキブリが知性体へと進化する  
それはありだが文具までもが

筒井自身コンパスや糊やナンバリングなどの文房具を宇宙船の乗組員にして、魑が高度な文明を築いている星にハルマゲドンを挑むという設定には惑いがある。魑が猿に代わって高度に進化し、文明を築くという設定は生物学者に言わせれば、魑では無理だということかもしれないが、猿でできないことが鳥にできないはずがないということで、手塚治虫は『鳥人大系』という名作を書いている。その最後にゴキブリが知性体に進化する可能性まで示唆している。

ところが文房具は生物ではない、生物でない文房具がどうして知性体に進化できるのか、そんなことはありえないではないか、「筒井、われ、気狂いさらしてんのちゃうけ」と河内のおっさんにもあきれ果てられたようだ。

作戦会議が始まる前に、上村陽一は思い切って叫んだ。「コンパスや糊がどうして、物を考えたり、感情をもったり、魑をやっつける作戦会議ができるのですか。こんな荒唐無稽な話は、気が狂ってるとしか思えません。」するとナンバリングが言った。「おやコンパス君、ついに自分の気が狂っていることを認めたね。そうなんだ、君は針の付け根がゆるんでいる。ときどき寝ているうちに締めなおしてあげているのだが、それがすぐにゆるんでしまうのだ。でも君は自分は完全な円を描いていると思っ込んでいます。」

文房具目、口、頭脳の欠けたれば  
いかで思ひて物を語るや

陽一は言い返した。「ナンバリングには言葉をしゃべる口もないし、物を見たり感じたり考えたりする機能もついていないはずだ。なのにどうしてそんなふうには話ができるのか変じゃないかって、そう言っているんだ。」「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。」ナンバリングは腹を抱えて笑った。「ナンバリングに口がないだと、コリヤ面白い、確かにナンバリングには口はないわな」輪ゴムは転げまわった「輪ゴムには足がない、手もない口もない鼻もない、目もない、それなのにどうしてこんなに話しているんだろう、確かに不思議だ。俺にも分からないな、永いこと宇宙船に乗っていると、俺も気が狂ったのかもしれない」と言うなり、自分でピンと張って、撥ねて飛び回った。

ホチキスは、自分のことは棚上げにして、巨大消しゴムを指差した。「さっきからずっと居眠りしている巨大消しゴムなんぞは、自分のことを天皇と思っ込んでいる。だから馬鹿丁寧な敬語を使って第三者を介して奏上してやらないとまるっきり仕事をしようとしな。そのかわり奏上の儀式を踏んでやると、血を流してでも力仕事をやってしまおう。」

三角定規がたしなめる。「ホチキスよ、そんなことを言って、巨大消しゴムに聞こえたらまたトラブルのもとだぜ。お前は何かと叫びたら、他人を批評したり、難癖をつけてはぶん殴られて、故障しちまうんだから、しょっちゅう針がつまったりして全くのトラブルメーカーなんだから、そうせずにおれないそういう性格もそうとうち狂っているぜ」。

漆黒の宇宙を旅する船の中  
ノーマルこそがアブノーマルかな

文鎮が立ち上がった。「こんな宇宙船に乗って何年も何十年も何にもない宇宙空間を飛び続けているのだから、みんな多少なりとも狂っているさ、狂っていて正常。正常なのは狂っているのさ。」みんななるほどうなずいた。「もっとも」と悟ったように文鎮は続けた。「どこの星に住んでいたって、その星自体が宇宙をさまよっていることに違いないんだ。だから宇宙船に乗らなくても、程度の差はあるにしても、宇宙船に乗っているのと同じで狂っていて正常、正常なのは狂っているのさ、ハ、ハ、ハ、ハ」と腹を抱えた。「全く違いねえ」とホチキスがガチガチ音を鳴らして、針を吐き出して、またトラぶってしまった。

コンパスになっている陽一はいたたまれない。「それにしても奇想天外すぎるよ。なぜ文房具たちが宇宙船にのって馳をやっつけるんだ、それにこうして議論したり、トラぶったり、とち狂ったりできるんだ。そんなのできっこないじゃないか。」

「馬鹿だなあ、奇想天外だから読者が喜ぶんだよ」画鋲がついに禁じ句を吐いた。役者がこれは芝居だと明かすようなものである。サインペンが言った。「そういえば、昔『美女と野獣』というミュージカルでは、家財道具が歌を歌っていたりしたな、あれは家来たちが魔法をかけられていたのだったっけ」。画鋲は、おしゃべりだ。「これは筒井康隆という流行推理作家が書いた“純文学作品”なんだ。とうとう種が尽きて文房具を宇宙船の乗組員にしたら面白いだろうと考えたのさ」。輪ゴムは笑った。「ハ、ハ、ハ、ハ。なんだそうかフィクションだったら輪ゴムが宇宙船を操縦してもいいのか。その筒井という作家こそ狂いまくってるんじゃないか。」

文房具身近にありしその故に、

人キャラ示すサインならめや

「そりゃあ読みが浅いな」文鎮がおもむろに言った。「筒井は我々を文房具だとしているが、

文房具というのは実は人間のキャラクターを表す記号なんだ。たとえばワッペン。我輩のような文鎮はずっしり重みがあって落ちついているだろう、そういう重厚な性格の人間が宇宙船の乗組員になっているということなんだ。」

「そりゃあつまらんな」ナンバリングは落胆した表情になった。「人間が宇宙船に乗ってたちのわるい馳の文明を滅ぼすのなら、ありきたりすぎるよ。文房具がこうやって意識を持って、話をしたり泣き笑いをしたりして、最後に馳と壮絶な殺し合いを展開するから面白いのじゃないか」と反論した。

チョークは情報通である。「実はこの『虚航船団』を書いてから、あまりの奇想天外ぶりに世間からあきれ果てられたのか、文房具が実は人間の性格を表す記号だという弁明を対談で語っている。それが『虚航船団の逆襲』という本に書いてあったそうさ。」画仙紙は首をかしげた「それにしてもチョークはどうして未来のことがわかるんだ。」するとチョークは平然と言った。「未来？ どうして未来なんだ、筒井が書いたのは西暦二十世紀の昔だよ、今はそれから千年以上たってるじゃないか。」そう言われればそうである。

アニミズム栄えし星は文具さえ

マイコンつけて心与えき

画鋲は、「それは読んでないな、俺はてっきり文房具に超ミニのコンピュータとか仕込んであってね、実は文房具型のロボットだと思っていたんだ。」チョークは苦笑した。「どうして文房具にそんな手の込んだことをしなくてはいけないんだ。」「俺の推理では、昔ある星ではあらゆる存在には魂が宿り、自我を持つべきだという汎神論的な考え方が流行したんだ。

それで文房具にまで自己意識を持たせようということになり、スーパー・マイクロコンピュータ内臓の文房具が開発された。つまり自己意識あるロボット文房具だな。しかし別にそんなこ

とをしても、文房具が勝手に事務をこなすだけで、たいしたメリットもない。それぞれ自己主張するのでスケジュールの調整もややこしくなる。それより元の普通の文房具の方がコスト面も考えるとはるかに効率的だ。それでロボット文房具たちはお払い箱になったので、集団で無人だった惑星に移住し、文房具星の文明を築いたのだ。」

### 分業で文具になりしムーピーが 世代重ねて形定まる

輪ゴムは別の推理を披露した。「生物の進化で考えます。不定形な動物ムーピーがいてそれぞれの役割にふさわしい形姿をとりますが、役目が変わればその姿も変形するとします。やがて社会的分業が発達します。その生物は何千何万の姿ができるので、自らの身体であらゆる仕事ができるのです。

地球人だったら無機物を材料にした道具や機械を使って行った作業を、自らが道具や機械の部品の姿をとって作業や生産を行っていたのです。ところが年月がたつにつれて体型が次第に固定化し、遺伝するようになりました。文房具の仕事を担当していた者たちは文房具の姿のままになってしまったわけですね。

そして文明の発達により彼らは知識の上では無機物を自分たちの体型のように変化させる事ができることを発見し、その方が技術的正確性、経済的合理性に優れていることに気付いたので。文房具などはその最たるものでしたから彼らは用なしになります。そこで文房具たちは一緒に新しい星に植民して文房具星を造ったのです。」

船長赤鉛筆は感心して言った。「整備士画鋏さんも操縦士輪ゴムさんも、超エリート養成の一流大学をトップ合格の秀才でお見事な推理ですね。でも私が心配なのは、お二人とも大学院で大阪哲学学校通信 No39

整備理論や操縦理論を研究され、すごい画期的な論文を発表されて脚光を浴びられたのですが、そのまま宇宙飛行士に大抜擢されたので飛行経験が全くないわけです。いざ戦闘という場面で落ち着いて整備や操縦ができるかということですね。」

何故経験の浅い若手を抜擢したのかということ、二つの理由が考えられる。宇宙船の進化が急速に進んでいるので、最先端理論をもってないと整備も操縦もできないということがまず第一の理由だ。もうひとつは宇宙船の旅は何十年という単位なので、途中で乗組員が死に絶えてしまう可能性がある。整備や操縦士が若くなければ帰還できないことも十分考えられるのだ。

それはともかく、頭でっかちの操縦士輪ゴムにもアイデンティティ不安がある。この不安は雲形定規でも画鋏でもあるのだが、いや規格品でない文房具なんてないから、どの文房具も大同小異なのだが、輪ゴムは、どれも同じ大きさ同じ形で全く違いがない。だから時々自分がだれだか、自分の意志がどうなのかも確信できない場合がある。特に輪ゴムは操縦士だから自分の意志が安全航行なのか逆噴射なのか分からないということでは、これほど物騒なことにもない。

コンパスは疑問を呈した。「しかし文房具星ほどの文明を築いている星ならば、渡航して文房具星を作った歴史的資料なども残っているはずですよ。ロボットか元不定形生物だったかも推理しなければならないというのも不思議な話です。」

画鋏は、「おいおい、もちろんそうなんだけれど、これはフィクションだから作家が書いてくれないと推理するしかないということなのさ、まだフィクションという現実がよく飲み込めていないんだな」と応えた。

文房具人と一つになりし故

人の心は物の心か

船長赤鉛筆は考え込んでいった。「作家は要するにふだん身近にある文房具にそれぞれの人格類型を当てはめて、文房具を人間の記号にしたといっているわけだろう。わしなんかは、船長だからいちいち細かくチェックを入れなきゃならない、だから赤鉛筆なんだろうな。でもそうやってしまえばナンバリングじゃないけれど、なあんだということではらけてしまう。ということは、文房具が意思や感情をもって行動するという設定が、ハッとさせるものがあったということだな。」

ナンバリングは頷いた。「そうなんです、船長。人間はコンパスを使って円を描いていても、コンパスが描いたとは思わないで、自分が描いたつもりでいます。機械を使って製品を生産していても、機械が働いているということ認めようとしません。文房具や機械があってはじめてできていることでも、あくまで主体としての人間なるものがある、その人間から機械や文房具は締め出されているのです。でも本当はどうでしょう。機械や文房具を含めてはじめて人間として主体であり、物事を認識したり、感情を抱いたりできるのではないのでしょうか。筒井はそこまで気づいていなかったけれど、作家の直感で文房具を人間に見立てたら面白いと思ったのは、そういう事情からと思うのですが。」

「そういえば榊周次先生が、機械や道具を含めた人間というのも考えるべきだと言っていましたね、ナンバリングさん。」どうもナンバリングを榊が演じているのではないかと陽一は睨んだのだ。陽一は元々、榊が人間でない機械や道具や環境的自然も含めて人間だと矛盾した表現をするのが納得いかなかった。機械も道具も人間なら、人間は何なんだ。榊は全く物事の定義や言葉の適用範囲を自分の都合で勝手気ままに変えてしまっている。それではコミュニケーション（意思疎通）が成り立たなくなるじゃないかと反発していた。

「つまりこういうことですか、ナンバリングさ

ん。機械や文房具を使って人間は物を生産したり、事務をしたり、製図を書いたり、作品を創作したりしている。それを人間は自分の体や頭脳や人格だけで行っていると思っているが、事物も一緒に行い、考えているのだ。だから身体ではなく文房具が人格を担っているように書いてもあながち間違っているわけではないじゃないかと、こういうわけですね。しかし機械や文房具にはそういうものを感じたり考えたりする機能はついてないじゃないですか。」

ドライバー車の思考にならぬなら

いくつあっても足りぬ命か

「もしドライバーが車の思考中枢にならなければ、いくつあっても命はたりないだろう。」突然車に話が飛んだ。コンパスははぐらかされたような気になった。「高度な機械と文房具と一緒に論じるのは飛躍ですよ。車と人間は別の存在です。車には思考中枢はないので、思考中枢を持っている人間が補完しているわけですね。考えているのは人間であって車ではないでしょう。」

「それじゃあ、頭脳が感じたり考えたりしているのか」とナンバリングは訊き返した。「だから頭脳だということでしょう」陽一は応えた。「もちろん頭脳は身体の一部として機能してはじめて考えるのだけれど、中枢神経として身体のみとまりをとりながら、思考や感情を受け持っているわけです。」

「でもさ、頭の中を開けたって、そこに思考が見つかったり、感情が見つかったりするわけではないんだ。頭脳やそれを包む身体もなければ意志や感情を感じられないのだけれど、意識は身体だけじゃなくて空気や環境的自然があり、当の対象があり、機械や道具との関係の中で生じているわけだ。だからこうも言えるだろう、目がバラを見ていることと、バラが目自己を写していることは同じ事態の裏表みたいなものだ

と。」

「さっぱり分からないなあ。バラには自分を目に写すという意識はありませんよ。」ナンバリング腕組をして考えてからおもむろに言った。「だからバラだって人の身体だって、それだけで存在しているのではなくて、バラや自動車との関係で、その他さまざまな事物との関係で存在している。」陽一はすぐさま反論した。「そうでしょうか、バラや車がなくても人間は生きていけますよ。」ナンバリングは困った表情をしながら「バラのある人生とバラのある人生とは全く違うんだよ。車のない時代の人間と車のない時代の人間も全く違うようにね」と語った。

十桁の数字が揃うと快感か

揃って消えるくるめきの時

突然、ナンバリングは数字をぐるぐる回しながら、あたかも頭脳をフル回転させているかに見えた。コンパスになっている陽一は心配げに言った。「ナンバリングさん、そんなに難しく物事を考えて壊れてしまいませんか。」

「いや、失礼、今ね、揃ったんだ、揃うとね、快感が走って、ぐるぐる数字を回してしまうんだよ。これはだれにも内緒だけれど、ナンバリングはいつも数を数えているんだ。3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 と3の十桁のぞろ目だよ。感激したな。分かるかな数字が1 2 3 4 5 6 7 8 9 0と順番に並んだり、ぞろ目になったりすると、美しいものだろ、その快感を味わうというのが私にとって生きていることの大きなご褒美なんだよ」と打ち明けた。

「そういえば数字が並ぶというのは気持ちいいものかもしれませんね。」三角定規が口を挟んだ。「数字だけでなく何でも順番にならんだり、同類のものが揃ったりすると楽しくなる。そして揃うとパッと消える。テトリスというゲームがあって横並びになるとパッと消える、その消えるのがたまらない。揃ったままいつまでもいてはつ

まらない。もったいないぐらいだけれど、揃うとすぐに消えてしまうから余計に美しい」。美意識の根っここのところに並んで消えるというものに対して快感を感じるということが関係していると陽一も納得した。

ハサミもガチャガチャと口を開いた。「俺は、対照的な対になっているのが、向き合って、そして合一するということに痺れるね。対極的なものが出会うと、その違いを意識し、その違いにいたたまれなくなって、合体によって合一する。違いを克服したという征服感が性的絶頂感になるのかもしれない。ここからも美意識が生じるのだ。」

末梢の快に溺る事なかれ、

戦い忘れれば部隊滅びぬ

凶悪な颯滅ぼす聖戦は、

己滅ぼす戦いならずや

船長赤鉛筆はチェックに入った。「それにしてもナンバリングさん、あなたは戦闘指揮官ですよ。戦闘中に数を数えていて、ぞろ目になって喜んで戦闘のことを忘れてしまったら、部隊は全滅じゃないですか。オッカネエナーモー、バッテン、バッテン」とスットンキョーな声をあげた。そして急に厳かな調子になって語りだした。「我々には、血なまぐさい争いを繰り広げ、核兵器まで開発して相手を皆殺しにしようとする凶悪な颯どもを絶滅し、宇宙の平和を守るという神聖な任務があります。この責務を全うしてこそ、真の偉大な任務を達成したという快楽や美意識を味わうことができるのです。あまりに末梢的な感覚だけの快楽に囚われては宇宙戦士としての資格を疑われますよ。」

エー、それじゃあ颯たちは地球の人間たちと変わらないじゃないか、ということは、宇宙連合の指令で地球にも文房具星などから天空の殺戮者たちが送り込まれ、絶滅戦争になってしま

うことになるということじゃないか。そしてそれが神聖な任務だということになる。陽一はなんと恐ろしい設定なのだと体が震えた。これから俺たちは魑を殺しまくらなければならない。地球だって憎しみあって殺しあっているように外の星からは見えるかもしれない。でもほとんどの人々は毎日の平和な暮らしに追われ、ささやかな幸福を守るために汲々としているのである。恐らく凶悪といわれる魑たちだって大同小異に違いない。本当に皆殺しにすることが神聖な任務なのか、しかしこの連中は全く自分たちの任務の正当性については疑問を感じていないようだ。まるで確信をもって原爆投下した米軍兵士たちのようだ。

#### 環境や事物を含めて人間を

##### 捉え返すが新世紀かな

「それにしても文房具も意識があるかどうかという議論はどうなったんだ」と議論好きの画鋲が話を戻そうとした。陽一は大量虐殺をしなければならぬことを思うとそれどころではないと思ったが、何しろ今回はフィクションと分かっているし、陽一がコンパスを演じているという自覚もあるので、ずいぶん気が楽だった。フィクションと分かっているだけにこれからどんな風に魑を殺しまくるのだろうと思うと何故か好奇心すらわく自分が怖くなった。そうした余裕から文房具人間論の議論にも参加できる気さえしてきたのだ。やはり陽一であることを意識できるというのは随分迫真性がなくなるものだと感じた。

「文房具というと個々の文房具だけを捉えて、それに感覚器官や言語中枢が備わっているかを見、そこから文房具には意志や感情はないことになる。でも文房具が文房具なのは紙に文字や図表を書いたり、あれこれの事務作業をしているからだ。それぞれの文房具は几帳面なのや、冷静なのや、ホットなのや激しいのがある。」こ

うナンバリングが説明していると、虫眼鏡が言った。「それは文房具を使う人間の性格なのじゃないですか？」

「杓子定規に考えるというように、文房具を使って作業することで、人間の意識や性格もそれにあったものに形成されるのだ。たしかに文房具を身体や頭脳の働きと切り離して論じれば、物体にすぎないだろうが、それならばわざわざ作られない。文房具に合った意識が形成されているのだから、その意識は脳髄を使った文房具の意識と考えることで、文房具の意識だという議論も成り立つわけだ。」

輪ゴムが仲介に入ってきた。「コンパスさんは頭が考える、頭を持っているのは人間だから、文房具や機械が考えるなんてありえないという。しかしナンバリングさんは文房具といったときすでにそれを使っている人間を代表するものとして文房具を捉えている。そのとき文房具と身体は切り離されていないんだ。もちろんコンパスさんのように身体と文房具が別物だということにこだわるのも間違いではないけれど、円を描くときはコンパスの意識になって円を描くというように捉えることも大切だ。」

ナンバリングなだめるようにコンパスに言った。「無理に納得したり、投げ出したりしないほうがいいんだ。いろんな捉え方をするものだなということで、そのうち自分の考えがはっきりしてくるのを待てばいい。ただそのためにも自分とは対極的な意見にも耳を傾け、相手の理屈からも学ぶところがあるのではないかと学ぶ姿勢を失わなければ、自分の思想を深めていけるものなんだ。」

#### 凶悪な欲望に生く魑こそ

##### 衝動止まらぬ人の姿か

コンパスは文房具人間論に対して、魑こそ人間じゃないか、その魑を絶滅することは、人間が人間を絶滅しようとしていることになるので

はないかという根底的な疑問を投げかけた。「いかに魴が凶悪でも、多くの魴口を抱え、巨大な文明を誇っているのだから、それなりに秩序や治安を持ってきたということであり、何も絶滅する必要はないでしょう、」と魴絶滅作戦に根本的な疑問を投げかけた。

「彼らは核兵器を開発し、その先制使用を宣言している。それに魴口の大爆発で、彼らは他の星に移動する計画を進めている。彼らは戦闘になったら敵をむさぼり食うんだ。やがて各星が今後存亡の危機に経たされる恐れがあるんだ。」  
 「人が人を食らうというのは、殺人と共に太古からの人間の衝動ですね。さすがに文明圏ではタブーとして禁止し、刑罰によって指導しています。魴は戦争となると抑圧が効かなくなるそうですが、それでも敵を食べている間は殺魴ができないだけ、大量虐殺が防げるわけです。地球の人間たちはそういう直接的な人食いはほとんどしなくなったけれど、互いの労働の成果を食べあっています。そして他人の働きに寄生し、他人から甘い汁を吸っている人もいるのです。その意味では大同小異でしょう。」

### 衝動と理性の断絶乗り越えて

#### カタルシス生む夢の世界へ

「人間は、一方で魴すなわち衝動的な生であると共に、文房具すなわち用在でもあるのです。文房具は徹底したカースト的分業を営んでいますが、人間も社会や集団や家族のために配慮し合い、互いの役割分担をこなして生きています。文房具すなわち用在の面から言いますと、分業の体系である文明は衝動的な生を抑制し、変形し、昇華して形成されたものです。ところがこれが固定し、慣習化してしまって、創造性や発達のエネルギーを失い、活力を磨り減らすだけになってしまったら、最早昇華機能を喪失してしまいます。いきどころなくなった生の衝動が破壊的な形で文明に作用するようになるわけ

です。

そこで文房具すなわち用在は自分たちの存在秩序を護るために虚航船団に乗って「天空からの殺戮者」になり、生の衝動すなわち魴たちの絶滅に乗り出したのです。

生の衝動すなわち魴の面から言いますと、生の衝動が自然が直接もたらす恵みに満足できなくなったために、より大きく生の衝動を充足させる文明を産み出しました。文明は生の衝動を疎外しましたが、生の衝動をより大きく充足させる事ができない文明は、生の衝動をコントロールできなくなって衰退します。しかし文明は疎外された形態においてであれ、生の衝動を肥大させてしまいます。最後には生の衝動は自ら文化の形を取りながら文化を破壊し尽す自滅の道を辿ることになるのです。生の衝動はそれ自体は自分自身に対して客観視できません。自己の疎外態である文明の原理、配慮の体系によって外から自己を徹底的に否定してもらわなければならないのです。

しかし文房具すなわち用在が生の衝動すなわち魴を絶滅できる訳がありません。生の衝動なしには用在も存在できないからです。生の衝動に新鮮なカタルシスをもたらしような常に創造的な文明は、文房具と魴の壮絶なハルマゲドンを経験した末に、産み出される、文房具と魴の抽象的な区別の止揚である、両者の息子の夢の中にしか築かれないのでしょうか。」

